

千載和歌集

上

544
八
12

0

150 cm

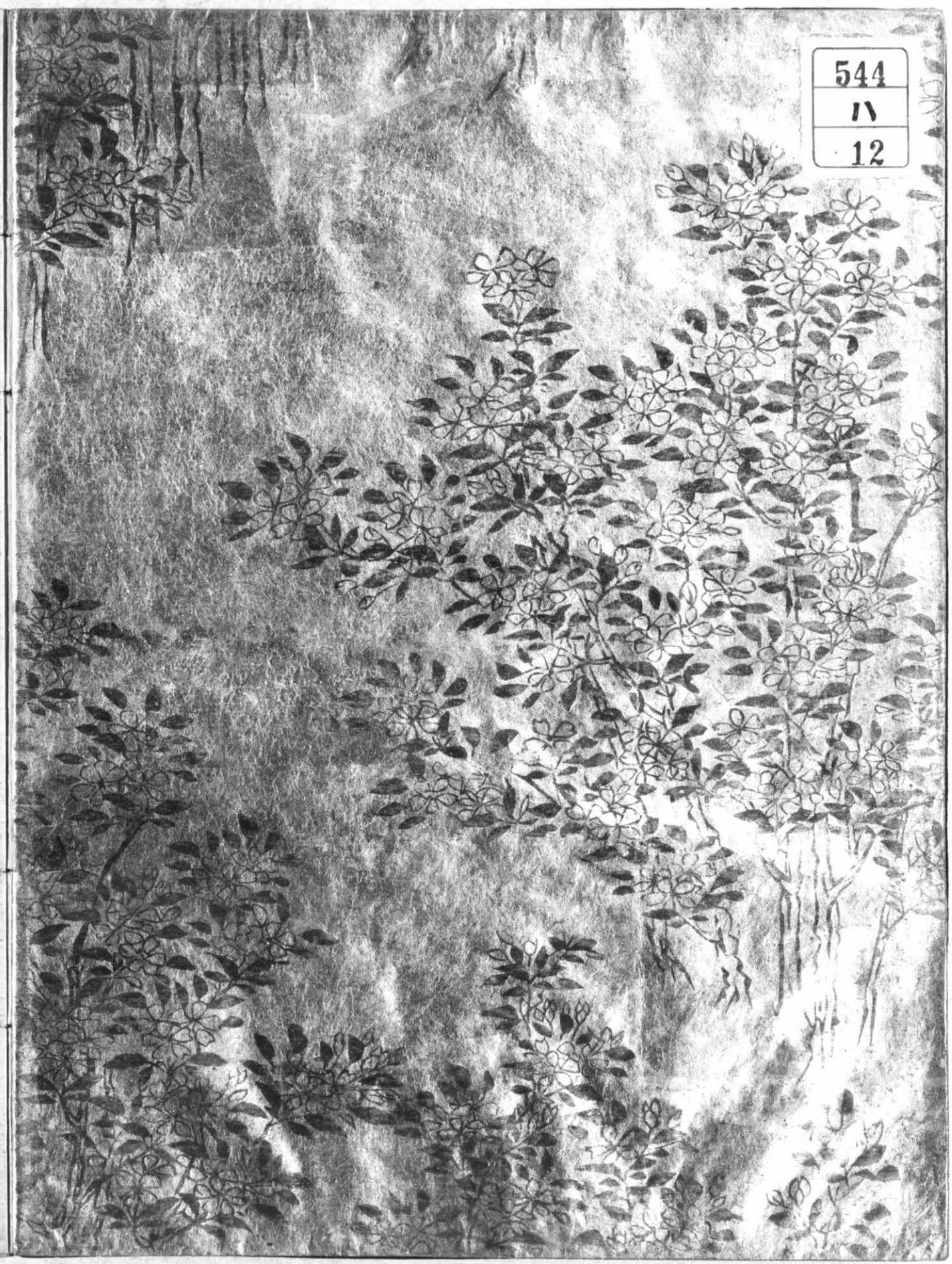
10



SEKISUI JUSHI

20

544
IV
12



Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document, spanning several lines across the page.



千載和歌集

玉月やみことのやいさをやあらねば
てらゝのまみちより宮にいらまされわが
―またりの宮にやてを延喜のころの
みまね今集をえゝる天曆のころに
よ、後撰集をあいめぬり白河の
後松達を勅せぬ河のえきとめらの
うたもよわ―の終つらんのこと
よの風俗と―にれまゝいもあそ
人々もせ―のころもあそく

はらゝのやみことのやいさをやあらねば
てらゝのまみちより宮にいらまされわが
―またりの宮にやてを延喜のころの
みまね今集をえゝる天曆のころに
よ、後撰集をあいめぬり白河の
後松達を勅せぬ河のえきとめらの
うたもよわ―の終つらんのこと
よの風俗と―にれまゝいもあそ
人々もせ―のころもあそく

ちか草のうゝあけなる（うみ）の
 ものききまゝにふりしに葉のくさ
 ちかもれわははの松のぬくくさ
 玉津のちかゝくさのうゝのちか
 ものききまゝにふりしに葉のく
 ちかのちかゝくさのうゝのちか
 ものききまゝにふりしに葉のく

法住寺入道前を政右衛門左衛門と傳へる時十
そ奇よもせ傳へるよとある

海士一六の御所

くしあまの野治を人かきとすく元れあわれ
な人し傳へる時あしあかし傳へる時あかの
と漢傳も

橋政前ふ人

あまの地治を人かきとすく元れあわれ
海に流れるそすくしあかの御所
とよある

赤中仙言はる

くしあまの野治を人かきとすく元れあわれ

赤の寺とある 刑部頼輔

春を夜のきとくあまの御所とすく元れあわれ

兵衛曹隆房

くしあまの野治を人かきとすく元れあわれ
さすくしあかの御所とすく元れあわれ

待賢院海河

くしあまの野治を人かきとすく元れあわれ
あし傳へる時あしあかし傳へる時あかの
の御所とすくしあかの御所とすく元れあわれ
とある

流島内媛

うもつちのト草花のやうに花をよすけいしたるもの
花に花のすくさくしよとてはなれどもうらなふらふ
すといふあり

今歸まはるらうとてうらなふ袖のさすめ
むじふのこころのやうに伝はるるあり
家の梅もたうとてうらなふのねにうらなふ

往中仙言後集

わがこころの梅のうらなふはうのうらなふ
色 浪後頼ねに

梅のうらなふはうのうらなふはうのうらなふ

梅のうらなふはうのうらなふはうのうらなふ

往中仙言後集

むじふのこころの梅のうらなふはうのうらなふ
永保二年二月名のうらなふはうのうらなふ
るといふあり 久我前と改む

かうのこころの梅のうらなふはうのうらなふ
梅河に花のうらなふはうのうらなふ
といふあり 久我前と改む

今も梅のうらなふはうのうらなふはうのうらなふ

往中仙言後集

ふしよーちうちい梅の花さいたるやそのよめ月
まはほほーちうちい梅の花さいたるやそのよめ月

大炊御門に在る

梅の花さいたるやそのよめ月
ふしよーちうちい梅の花さいたるやそのよめ月

藤原通信に在る

ふしよーちうちい梅の花さいたるやそのよめ月
まはほほーちうちい梅の花さいたるやそのよめ月

ふしよーちうちい梅の花さいたるやそのよめ月
まはほほーちうちい梅の花さいたるやそのよめ月

ふしよーちうちい梅の花さいたるやそのよめ月
まはほほーちうちい梅の花さいたるやそのよめ月

藤原通信に在る

ふしよーちうちい梅の花さいたるやそのよめ月
まはほほーちうちい梅の花さいたるやそのよめ月

藤原通信に在る

ふしよーちうちい梅の花さいたるやそのよめ月
まはほほーちうちい梅の花さいたるやそのよめ月

ふしよーちうちい梅の花さいたるやそのよめ月
まはほほーちうちい梅の花さいたるやそのよめ月

藤原通信に在る

ふしよーちうちい梅の花さいたるやそのよめ月
まはほほーちうちい梅の花さいたるやそのよめ月

はる新言言

かぜから新言の梅一夢を思ふにふくまの如きの
申はよ侍もさる梅のおろへきしはかひい
むとくもさる人の二月に花はさき
たろへきしむすはきしをさる人
後成洋一つうけり

大新言言

いづちちも新言の梅一夢を思ふにふくまの如きの
梅河は思ふにふくまの梅一夢を思ふにふくまの如きの
らんもさる

前中言言

いづちちも新言の梅一夢を思ふにふくまの如きの
梅河は思ふにふくまの梅一夢を思ふにふくまの如きの

藤原其後

いづちちも新言の梅一夢を思ふにふくまの如きの
梅河は思ふにふくまの梅一夢を思ふにふくまの如きの

いづちちも新言の梅一夢を思ふにふくまの如きの

梅河は思ふにふくまの梅一夢を思ふにふくまの如きの

いづちちも新言の梅一夢を思ふにふくまの如きの
梅河は思ふにふくまの梅一夢を思ふにふくまの如きの

藤原其後

いづちちも新言の梅一夢を思ふにふくまの如きの
梅河は思ふにふくまの梅一夢を思ふにふくまの如きの
新言の梅一夢を思ふにふくまの如きの
梅河は思ふにふくまの梅一夢を思ふにふくまの如きの

藤原其後

[illegible][illegible]

よき

源とよしの松尾

去れん寺のむのちも今やかゝる重海よと云ふを
西序のそんをいふ侍者

西序の主人より伝書

近中特良經

御共平なる元
 のうまといふ
 ようなぬく
 ことありぬ
 従て佐頼政

從之任賴政

天は元は乃たゆまの海の底をよけりとの唐

金

祝新宿社成伴

[illegible]

紫花後。るる。平。古。水。草。る。時。去。平。と。

2 欠 3

孫厚季通如片

今花の末ふもあはてきふじの
 るきなりきる時ふきふじの

る事なり時を以ててふ也

本

宗師及御製

おたふきやうびいねのうらうらめき

待賢門院 海河

うゝ花笑やんとおふまのふゝちるあふれ
白河院の花咲かゝたりやうげふやう

白河氏の花火よりたりやうげんやう

つらき心なげきしるも

まねある政を

し極つたもふくむればまのいのちくわうれ
るおほくのちやせいのうて後白河
の事あらう花も咲くけり日よる傳も

花園のた

ひまより花のいふとふくむるまの白河のふ
はみみのかういふとふくむ
る代の花のちやせいのうて後白河
の事あらう花も咲くけり日よる傳も

るに花のいふとふくむるまの白河のふ

まねある政を

し極つたもふくむればまのいのちくわうれ
るおほくのちやせいのうて後白河
の事あらう花も咲くけり日よる傳も
はみみのかういふとふくむ
る代の花のちやせいのうて後白河
の事あらう花も咲くけり日よる傳も

中洲のた

し極つたもふくむればまのいのちくわうれ
るおほくのちやせいのうて後白河
の事あらう花も咲くけり日よる傳も

まねある政を

花のうしろをいそいでみるに花のうしろ

京都のあゝ十條信頼一侍も時白河

に血をせよと浴びてのりすもいせなる

もろしう侍も 京都前のおおきき

標花のうしろをいそいでみるに花のうしろ

後二条国白内大臣

花のうしろをいそいでみるに花のうしろ

右衛門督春建

花のうしろをいそいでみるに花のうしろ

毎朝花のうしろをいそいでみるに花のうしろ

中近右大臣

花のうしろをいそいでみるに花のうしろ

花のうしろをいそいでみるに花のうしろ

左のわかいより

花のうしろをいそいでみるに花のうしろ

十ヶ年人のうしろをいそいでみるに花のうしろ

侍も

前左衛門督春建

花のうしろをいそいでみるに花のうしろ

花のうしろをいそいでみるに花のうしろ

侍も

左京入道春建

年をくらす所の花をさるゝあまの心ちを

藤原の御歌

さきさきの心はくちをさるゝあまの心ちを

かきとる人の心をさるゝあまの心ちを

あまの心ちを

あまの心ちをさるゝあまの心ちを

あまの心ちを

あまの心ちを

あまの心ちをさるゝあまの心ちを

あまの心ちを

あまの心ちを

あまの心ちをさるゝあまの心ちを

あまの心ちを

あまの心ちをさるゝあまの心ちを

あまの心ちを

あまの心ちをさるゝあまの心ちを

あまの心ちを

あまの心ちをさるゝあまの心ちを

あまの心ちを

あまの心ちを

まゝにしつゝふらふらと花をいぢるうらうらと
あはれ

待賢門は城河

白き土のまはりの花をいぢるうらうらと

しつゝに兵衛

花の色はまゝにうらうらと花をいぢるうらうらと

あはれ

うらうらと花をいぢるうらうらと

藤原の歌

うらうらと花をいぢるうらうらと
うらうらと花をいぢるうらうらと

うらうらと花をいぢるうらうらと
うらうらと花をいぢるうらうらと

千載和歌集卷第二

春分下

多ねぬふたりやけり此常尺花とて心
 をものともつとふけり此とよせり
 まけり
 白河院御歌

白河院御製

三つちりまゝに花の下に花より散りしをわかれ
 みこふたりもけりおほいけりせ給へ
 もろは花とてくさるる。子にせ給え
 花の下に花より散りしをわかれ
 山花の心もよみけり

大寶前上政上臣

白雲とぬふ人にて梅花と逢ふものゝうちより有き
るや奇をわけける梅花の奇なりとあり

養正通和

野山を眺めたるは、
寛政八年の秋、
陽後のまひるに、

周后内侍

山極おむのころみちるふみもとよゆきかへん
後朱耆氏の時人のものとも东山の文

尺傳もろし田のすわんを白河はよとまて
るのくす浪傳もろよふ傳もろ

大納言の歌

ま雨もちる花をいひやうにまもるまのひら
る花はふとふとふとふとふとふとふと
わあけしきいふいふいふいふいふいふ
海川はあけしきいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふ

藤原仲実の歌

花のうすのいふいふいふいふいふいふ
藤原のうす

まもる花のうすのいふいふいふいふ
まもる花のうすのいふいふいふいふ
まもる花のうすのいふいふいふいふ

わあけしきいふいふいふいふいふいふ
まもる花のうすのいふいふいふいふ

赤松源親隆

まもる花のうすのいふいふいふいふ

此の奇とて人傳せり

大田中惺良經

はるき世にのつくもよき花とていふことの浪
花ぬきとていふ人も人傳せり

大田中惺良經

ちりきり花のふりしはなとていふ人も人傳せり
花のふりしはなとていふ人も人傳せり

大田中惺良經

あつちと袖とつめあはれとていふ人も人傳せり
人我の内のたぐひとていふ人も人傳せり

とていふ人も人傳せり

大田中惺良經

はるき世にのつくもよき花とていふことの浪
花ぬきとていふ人も人傳せり

大田中惺良經

ちりきり花のふりしはなとていふ人も人傳せり

大田中惺良經

あつちと袖とつめあはれとていふ人も人傳せり

大田中惺良經

はるき世にのつくもよき花とていふことの浪

大田中惺良經

あつちと袖とつめあはれとていふ人も人傳せり

海仲腰

は梅ちるもてうきちしなわ人きさるちち
花乃ちるもてうき伝もさ

通命法師

まうくまうく梅花月のまうくまうく
池まうくちるもてうき伝もさ

徳国法師

梅ちる水のまうくまうくまうくまうく
花乃ちるもてうき伝もさ

花国の人

は梅ちるもてうきちしなわ人きさるちち
花乃ちるもてうき伝もさ

花大の人

は梅ちるもてうきちしなわ人きさるちち
花乃ちるもてうき伝もさ

花大の人

は梅ちるもてうきちしなわ人きさるちち
花乃ちるもてうき伝もさ

花大の人

は梅ちるもてうきちしなわ人きさるちち
花乃ちるもてうき伝もさ

ふいふふふふふふふふふふふふふふふ
仿如清親ふふふふふふふふふふふふ
ふふふふ

源仲正

ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ

松本海峽隆

ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ

藤原重國親

ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ

中野言通房

ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ

中野國信

ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ

源理人又源孝

ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ

源國親

ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ

堀川に流するそのつらふに流るるあり

赤中御衣通書

まよふわのにふみうさうていつたにむすの花

藤原基俊

ふ次の花をさへかてあめふも人々やとや

海河に流す花はあふふに流るあふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふ

二葉をうへぬ宮の花は

九重にふたふふふふふふふふふふふふ

氷を数ふふふふふふふふふふふふ

藤原光俊

あふふふふふふふふふふふふふふふふ

藤原定家

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふ

惟家実言

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

藤原信輔卿

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

江戸に在る所のあすかへ伝まつ時藤花
もあはれ

康安五年

いふふいふふいふいふのたふとあはれなること
水天の御内裏へかへ藤花を伝へまつ

中絶を伝へ

九月廿二日あはれいふのたふとあはれなること
あはれなることあはれなることあはれなること

大炊御門に在る

年暮とあはれなることあはれなることあはれなること
あはれなることあはれなることあはれなること

あはれなることあはれなることあはれなること
あはれなることあはれなることあはれなること
あはれなることあはれなることあはれなること

二条院に在る

あはれなることあはれなることあはれなること
あはれなることあはれなることあはれなること
あはれなることあはれなることあはれなること

三条院に在る

あはれなることあはれなることあはれなること
あはれなることあはれなることあはれなること
あはれなることあはれなることあはれなること

四條院に在る

中絶を伝へ

あはれなることあはれなることあはれなること
あはれなることあはれなることあはれなること
あはれなることあはれなることあはれなること

千載和歌集卷第三

夏奇

河内院以時るそあはれけり時実ふのんを

ふと伝へる

和中西之臣等

及ふ花の夜ふねふくそふのねふともふくわ

藤原基俊

介ねふと時ふふふとねふ夜ふふふふふふふ

宗法院よりふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふ

藤原実信朝臣

おふふふのわふふふふふふふふふふふふふ

和花をふふ

和京人又歌補

しふふふけり時ふふふのふふふふふふふ

春ふふ花といふふふふふふふふふふ

和近人時実等

夕附ふふふふふふふふふふふふふふふ

和花のふふふふふふふふふ

仁和後人通法親王又性

玉川ふふふふふふのふふふふふふふふふ

白河院ふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふ

藤原季通宛に

人として人たるは人の名にふさわしく
を討ちたといふはよき事なり

又藤原政平

人の名にふさわしく人を討ちたといふは
即ち人を討ちたといふはよき事なり

又藤原政平宛に

人の名にふさわしく人を討ちたといふは
即ち人を討ちたといふはよき事なり
草のよき事なり

藤原季通宛に

人の名にふさわしく人を討ちたといふは
即ち人を討ちたといふはよき事なり

藤原季通宛に

人の名にふさわしく人を討ちたといふは
即ち人を討ちたといふはよき事なり
日人の名にふさわしく人を討ちたといふは
即ち人を討ちたといふはよき事なり

人の名にふさわしく人を討ちたといふは
即ち人を討ちたといふはよき事なり
仁徳の徳にふさわしく人を討ちたといふは
即ち人を討ちたといふはよき事なり
仁徳の徳にふさわしく人を討ちたといふは
即ち人を討ちたといふはよき事なり

藤原季通宛に

おひつらうしつわ部とまのいくのふなるくむ
きつ大部とといふらんまふ傳ける

仁和寺法親王尊号

部と伝といふまのいふ又なるまのいふなるま
部といふとくまふ

藤原清輔卿に

かうまゆいなるまのいふのまのいふなるま

後三位頼政

いふなるまのいふ部とまのいふなるまのいふ
なるまのいふなるまのいふなるまのいふなるま

まのいふなるまのいふなるまのいふなるま

頼政公に

まのいふなるまのいふなるまのいふなるま
藤原部といふなるまのいふなるま

その大なるまのいふなるま

かゝるまのいふなるまのいふなるまのいふなるま
部といふなるまのいふなるま

頼人卿に

かゝるまのいふなるまのいふなるまのいふなるま

頼人卿に

夕つて東より山に雲はるるのくちの郭に

新入衛門の

なまはるるにわれぬ一ふふふの元もさうあつた

新政をたすの時今一郭のすきと

久

白をぬきさうさう

とてわつたおのときおのときおのとき

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

せつまつふふふ

道因法師

来るがれぬわふふふふ郭にふふふふふふ

郭もふふふ

村中池を

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

久我内をたのふふふふふふふふふふ

ふふふ

本中池を雅頼

お人のふふふふふふふふふふふふふ

品庸のふふふふふ

新政を

ふ月内ふふふふふふふふふふふふ

内を

新らくふふふふふふふふふふふふ

後朱雀院の時ふふふふふふふふふ

の年合と花梅もあつ

枇杷殿主人の言ひ

やうな花梅もあつた

歌一し 藤原冬後

かきつる花梅もあつた

藤原冬後

かきつる花梅もあつた

大平親実

かきつる花梅もあつた

藤原冬後

藤原冬後

かきつる花梅もあつた

藤原冬後

藤原冬後

かきつる花梅もあつた

藤原冬後

かきつる花梅もあつた

藤原冬後

藤原冬後

かきつる花梅もあつた

源俊賴親王

木下つれつとて侍人のこゝろや又月田の元
中庭の入道なれば中持より侍る時
今侍もつと又月田の元とてある

藤原親仲親王

月田の元といふものゝこゝろに侍るも
家法に侍るも侍るも侍るも侍るも

八宗人又親補

いふものゝ親補といふものゝ親補といふものゝ親補

前奉源親隆

月田の元といふものゝ親補といふものゝ親補

皇太子又後成

月田の元といふものゝ親補といふものゝ親補

藤原親補親王

月田の元といふものゝ親補といふものゝ親補

待賢門院女御

月田の元といふものゝ親補といふものゝ親補

橘公高に侍るも侍るも侍るも侍るも

月田の元といふものゝ親補といふものゝ親補

いふものゝ親補といふものゝ親補といふものゝ親補

後泊五月雨といふ事もある

源仲子

昔雨のとき初れては雨止の後の雨
月前部といふ事もある

賀茂成保

雨の中へといふ事もある
雨の中へといふ事もある

後事使符人

雨の中へといふ事もある
雨の中へといふ事もある

中洲言師時

あまの部といふ事もある
あまの部といふ事もある

津師慶隆

あまの部といふ事もある
あまの部といふ事もある

源俊頼親

あまの部といふ事もある
あまの部といふ事もある

坂河院の御書から同月部と
とくくつなふに付書

在中所言後書

月部にはいふに、
たるに、
ふに付

在中所言後書

そのふに、
修理人又別書

月部にはいふに、
在中所言後書

付けるに、

藤原公深卿に

月部にはいふに、
とくくつなふに付書

人並の書

月部にはいふに、
源仲に

月部にはいふに、
ふに人

月部にはいふに、

氷室より渡付しる 仁和寺後入道法親王

去秋を後のる人なるものさへしるるそのお

るをまたしるる時氷室のすゝと渡付

しるる 大炊御門公上臣

あまのしるるもさる氷室にまぎる氷室のさへ

しるる 法下慈田

に渡付しるるをまたしるるをまたしるる

藤原通親

るをまたしるるをまたしるるをまたしるる

後醍醐天皇

るをまたしるるをまたしるるをまたしるる

顕祖法親王

るをまたしるるをまたしるるをまたしるる

るをまたしるるをまたしるるをまたしるる

法眼実休

るをまたしるるをまたしるるをまたしるる

文永癸卯月二十一日

藤原通親

るをまたしるるをまたしるるをまたしるる

文月二十一日 祝部右近衛公

うきとちりもふもふ日なうきとちりもふもふ

夕日くくくく

くくくく

みちのくにけしきもあやうきとちりもふもふ

秋風くく

千載和歌集巻第四

秋声

あきいささか人伝

侍従のめり

秋はあきいささかおれ秋の風の吹かす

仁徳寺の二の法殿

海峯とあきいささか秋の風の吹かす

あきいささか秋の風の吹かす

信奥門は海河

秋の風の吹かすあきいささか秋の風の吹かす

八重はうにふみ遊生よそ秋のふりてん

ちぬの秋のふき草

寐龍法師

秋手ぬきつるそいふはなを萩の風がよす

よみ

本より父と母あるを秋風吹はるるを
 秋立秋といふを人を知る

秋立といふころを

賀正重政

秋山の松竹風もはるかに吹かす

郁芳門院の最我今上様をよめる

大藏印

よもぎの秋をうきとせうたふもろかみじハ秋の上と
ちめ秋のうきとあは

るゝめの秋の空をよめる

源俊賴卿

[illegible]

まのまをわけ

校政前衣衣

ちよのうらむとてうへよのゆゑの元
るやあまのうらむとてうへよのゆゑの元

るをきけりやのこころ

大納言降参

まのあまのいそしき秋のふりさけのうらみは
極河原のしるしをいふ時ふた
も

二條天皇大納言降参

まの天の衣のふりさけのうらみは

大納言降参

まの天の衣のふりさけのうらみは

源後頼朝降参

まの天の衣のふりさけのうらみは
まの天の衣のふりさけのうらみは

大納言降参

まの天の衣のふりさけのうらみは
まの天の衣のふりさけのうらみは

大納言降参

まの天の衣のふりさけのうらみは
まの天の衣のふりさけのうらみは

みつけ

大納言降参

まの天の衣のふりさけのうらみは
まの天の衣のふりさけのうらみは

みつけ

大納言降参

まの天の衣のふりさけのうらみは
まの天の衣のふりさけのうらみは

雲龍寺の膳西上人庵より命へ傳へる

時よ久し

藤原道隆

あやうしおのちやとていふことより久しき節の

新也

草花告秋といふはまゝ

法下神賢

秋のわづらひをいふに實は秋のあやをいふ

題一

いふ人

いふはういふはうの秋のふたつにいふはうの

わづらひ

今もいふはうの秋のふたつにいふはうの

新也

藤原仲家

秋のふたつにいふはうのふたつにいふはうの

藤原家

秋のふたつにいふはうのふたつにいふはうの

大言法師

秋のふたつにいふはうのふたつにいふはうの

秋のふたつにいふはうのふたつにいふはうの

大言法師

秋のふたつにいふはうのふたつにいふはうの

秋のふたつにいふはうのふたつにいふはうの

とくしうしあ

赤中抄言邪を

昔はやくしうしあは秋の吹くときよりいふ
うけく事伝ふ所昔をうけいふは

赤中抄言邪を

昔はやくしうしあは秋の吹くときよりいふ

とくしうしあ

赤中抄言邪を

昔はやくしうしあは秋の吹くときよりいふ
うけく事伝ふ所昔をうけいふは

昔はやくしうしあは秋の吹くときよりいふ

赤中抄言邪を

昔はやくしうしあは秋の吹くときよりいふ

昔はやくしうしあは秋の吹くときよりいふ

赤中抄言邪を

昔はやくしうしあは秋の吹くときよりいふ

赤中抄言邪を

昔はやくしうしあは秋の吹くときよりいふ

赤中抄言邪を

花すもよみくはふとをきりつゝとわらふいふるふと
くくもよす傳もろこや秋こそまろふたや
てふも傳ける 前大納言公任

法性寺入道永平政工所

秋の月を振の雲にあるよりとれぬ所のさきもあら
城河院に時るそあなけりし時もある

河内氏を以てあはれけり

源氏物語の巻

本邦の宣吹とすはねるに一月の間の

隆源法師

三日月にけしきもいふもくもくしきなり
 松政前太右衛門のまゝなるをいふもくもくしき
 時月の奇なり

時月の寺とある

蘇恩隆信札

おわら月入ともうさしをすまひのたれお元

月可々之傳け

前中邪之雅類

くまのすくすく、秋の月とあはれよ、をみゆるに

皇太后宮人交淑成十女并女傳

時ふつり傳ちしに月乃奇

右の如くいふより

月夜はるかにさしるの光もさびしくあけ

行中初之緩急の要をみえ月と云ふ

源氏物語

源坂頼朝

おきよに野に花をいかにいふに父の道は月をい

るきすめりし月すきしきせきよき

空は月をいふ

玉ふりてみれば花をいふに父の道は月をい

大炊御門をい

小東宮のちのうねは月をいふに父の道は月をい

皇太子宮人又後

ふりてみれば花をいふに父の道は月をい

藤原は月をい

恒のよき花をいふに父の道は月をい

法皇寺入道ふりてみれば花をいふに父の道は月をい

友といふに父の道は月をいふに父の道は月をい

源俊頼をい

おきよに野に花をいかにいふに父の道は月をい

おきよに野に花をいかにいふに父の道は月をい

おきよに野に花をいかにいふに父の道は月をい

藤原は月をい

秋の来や天の河をいかにいふに父の道は月をい

法皇寺入道ふりてみれば花をいふに父の道は月をい

伝ふに父の道は月をい

海茅原とてふやうな處といふをよみてよる月

影不立

藤原信輔卿に

よきもろちむの秋をわかれかきし月父よかき

刑部卿頼輔

かのよみ秋はよきもろちむの秋をわかれかきし月父よかき

藤原信成卿

人々の秋をわかれかきし月よきもろちむの秋をわかれかきし

市人助玄成卿

たかきつゝの秋のよき月をのぞいてあはれ

法持寺入道あはれつゝの秋のよき月をのぞいてあはれ

月よきもろちむの秋をわかれかきし

源俊頼卿に

あはれつゝの秋のよき月をのぞいてあはれ

あはれつゝの秋のよき月をのぞいてあはれ

あはれつゝの秋のよき月をのぞいてあはれ

あはれつゝの秋のよき月をのぞいてあはれ

あはれ

あはれつゝの秋のよき月をのぞいてあはれ

千載和歌集卷第九

秋奇下

題不知

大武之位

くらきくらきと秋のけさめのはらるる
 城川に水時るそすもあまら時よあま

袁仲實題

山室よりふるをわたりし
の吹ゆふをいふべきを
字は後よりそそりけり時秋のそと

子

養正通和

秋の来たるをふねはるかにしるしのきこえて

法住寺入道兼右近衛左大臣の傳々時の
衆の奇令に野人となつて居るやあり

養正時昌

永曆二年丙寅年合しよめろ

藤原正家卿

冬其小野、夜忽雪、ふりくもつる。さかみちる。
 依河、後以時るそ、可也。おける時、あら

二条子宜今拓寬肛收

[illegible]

大物言ふ実

うはつともおまへんはつた事もあつたにや

題文を

浦仁親王

秋の来はちんとも度の変更をくらへるれ
といひつゝ度ひつゝまた後傳を

源俊賴親王

ちんともおまへんはつた事もあつたにや
うはつともおまへんはつた事もあつたにや

待賢門院殿

ちんともおまへんはつた事もあつたにや

長泊殿といふ事もある

刑部花を

漆にうぬの漆はちんともおまへんはつた事もあつたにや

義隆隆信親王

うはつともおまへんはつた事もあつたにや
ねん

俊成法師

来はちんともおまへんはつた事もあつたにや

通国法師

漆にちんともおまへんはつた事もあつたにや

度きふたつといふ事もある

延徳法師

宮内卿の御寮に在りて御寮の御寮に在りて

唐弁とてあり 氏京人又備紀

は即ち御寮に在りて御寮に在りて

右京人又備紀

は即ち御寮に在りて御寮に在りて

法師 延徳

御寮の御寮に在りて御寮の御寮に在りて

後延法師

御寮の御寮に在りて御寮の御寮に在りて

延徳法師

御寮の御寮に在りて御寮の御寮に在りて

延徳法師

御寮の御寮に在りて御寮の御寮に在りて

延徳法師

御寮の御寮に在りて御寮の御寮に在りて

延徳法師

御寮の御寮に在りて御寮の御寮に在りて

延徳法師

御寮の御寮に在りて御寮の御寮に在りて

題

通にほ歌と

たのめとゆふとふかき野のちから秋の月をける

秋の月歌と

草はよも秋の世急ぐ人ゆく月うたふとちかき人

後たふはる時九月とて来月あはれきり

よふゆける

人なれをわがいのちを

とじふとちかきと秋の月をけると秋の月をける

十二月のちかき

人へへ次

秋の月をけると秋の月をけると秋の月をける

月をける人へへ次

小来更てまぬらふと秋の月をけると秋の月をける

海河はる時うたふと秋の月をける

よふゆける

人なれをわがいのちを

ふむとちかきと秋の月をけると秋の月をける

源とて人の歌と

秋の月をけると秋の月をけると秋の月をける

秋の月歌と

秋の月をけると秋の月をけると秋の月をける

秋の月歌と

侵國法師

衣ふちをさうきねる里さうね 草よくとハ
 音のあとくさくさ

法橋象圓

又昔や秋のわらふにありては入袖の衣をうろふ
養の草花といふ心もいふをいふにけり

崇徳院御製

秋ふたたびこの葉よりいらのうらうら
るるあはれいふ時もある

前奉酒祝隆

いふて家もそめが音よとせのいふやうに
法住寺へ送るに政太郎に上りし傳け
時表の今公に披露をよめり

養正とて

とわかれはるゝ病をいふよておこるひやく白菊の
月照菊花といふてんをよみつけ

内之臣

白菊の葉より花より
霜より雪より
霜菊より雪菊より

前人儆心銘

おのゝけのふりかへしにけりてはなほさるるをいふ

菊のふりかへしにけりてはなほさるるをいふ

おのゝけのふりかへしにけりてはなほさるるをいふ

菊のふりかへしにけりてはなほさるるをいふ

藤原の隆

おのゝけのふりかへしにけりてはなほさるるをいふ

菊のふりかへしにけりてはなほさるるをいふ

藤原の隆

おのゝけのふりかへしにけりてはなほさるるをいふ

菊のふりかへしにけりてはなほさるるをいふ

藤原の隆

藤原の隆

おのゝけのふりかへしにけりてはなほさるるをいふ

菊のふりかへしにけりてはなほさるるをいふ

藤原の隆

おのゝけのふりかへしにけりてはなほさるるをいふ

藤原の隆

おのゝけのふりかへしにけりてはなほさるるをいふ

菊のふりかへしにけりてはなほさるるをいふ

おのゝけのふりかへしにけりてはなほさるるをいふ

秋の日は暮れぬやうに長き日なりけり

あきのはるかなとて思ふにけり

傳けり

後醍醐天皇

あきのはるかなとて思ふにけり

あきのはるかなとて思ふにけり

後醍醐天皇

あきのはるかなとて思ふにけり

あきのはるかなとて思ふにけり

傳けり

北條時宗

あきのはるかなとて思ふにけり

あきのはるかなとて思ふにけり

北條時宗

あきのはるかなとて思ふにけり

あきのはるかなとて思ふにけり

あきのはるかなとて思ふにけり

後醍醐天皇

あきのはるかなとて思ふにけり

後醍醐天皇

あきのはるかなとて思ふにけり

承應二年の月日なり

朱は流津歌

まはるくちのちのちをいひてなまゝまゝ

大炊津門を大炊

まはるくちのちのちをいひてなまゝまゝ

大炊言降き

まはるくちのちのちをいひてなまゝまゝ

秋のちのちをいひてなまゝまゝ

まはるくちのちのちをいひてなまゝまゝ

花園に人をお小人道

まはるくちのちのちをいひてなまゝまゝ

まはるくちのちのちをいひてなまゝまゝ

藤原孝子

まはるくちのちのちをいひてなまゝまゝ

まはるくちのちのちをいひてなまゝまゝ

まはるくちのちのちをいひてなまゝまゝ

まはるくちのちのちをいひてなまゝまゝ

大炊津門を大炊

まはるくちのちのちをいひてなまゝまゝ

まはるくちのちのちをいひてなまゝまゝ

秋のちのちをいひてなまゝまゝ

まはるくちのちのちをいひてなまゝまゝ

てゆらんしめぬのまじりあつてはて霜せうじ

藤原冬後

秋生するもの海草はるく霜の上へてふもかたかた

そらそめの子とてよめ

藤原定家

ふちていふよすけのまじりあつてはて霜せうじ

藤原冬後

藤原定家

霜せうじあつてはて霜せうじあつてはて霜せうじ

馬内侍

あつてはて霜せうじあつてはて霜せうじあつてはて霜せうじ

はて霜せうじあつてはて霜せうじあつてはて霜せうじ

あの子あつてはて霜せうじあつてはて霜せうじ

藤原定家

あつてはて霜せうじあつてはて霜せうじあつてはて霜せうじ

あつてはて霜せうじあつてはて霜せうじあつてはて霜せうじ

あつてはて霜せうじ

藤原定家

あつてはて霜せうじあつてはて霜せうじあつてはて霜せうじ

あつてはて霜せうじあつてはて霜せうじあつてはて霜せうじ

藤原定家

あつてはて霜せうじあつてはて霜せうじあつてはて霜せうじ

源氏物語の御成敗

源氏物語

源氏物語の御成敗

源氏物語

源氏物語の御成敗

源氏物語

源氏物語の御成敗

源氏物語

源氏物語の御成敗

源氏物語

源氏物語の御成敗

源氏物語

源氏物語

源氏物語の御成敗

源氏物語

源氏物語の御成敗

源氏物語

源氏物語の御成敗

源氏物語

源氏物語

世にあらざるものなりとて

漢人

の世にあらざるものなりとて

の世にあらざるものなりとて

漢仲頼

の世にあらざるものなりとて

紀康宗

の世にあらざるものなりとて

漢仲頼

の世にあらざるものなりとて

漢仲頼

漢仲頼

の世にあらざるものなりとて

漢仲頼

の世にあらざるものなりとて

の世にあらざるものなりとて

漢仲頼

漢仲頼

の世にあらざるものなりとて

隆源法師

はつちゝるゑとよほしむるのたよしの終のちるゑと

源俊賴朝臣

又のちるゑとよほしむるのたよしの終のちるゑと

傳人朝臣源俊賴朝臣のちるゑとよほしむるのたよしの終のちるゑと

源俊賴朝臣

いゝとせとよほしむるのたよしの終のちるゑと

千とせとよほしむるのたよしの終のちるゑと

源俊賴朝臣

いゝとせとよほしむるのたよしの終のちるゑと

源俊賴朝臣

いゝとせとよほしむるのたよしの終のちるゑと

源俊賴朝臣

いゝとせとよほしむるのたよしの終のちるゑと

源俊賴朝臣

いゝとせとよほしむるのたよしの終のちるゑと

千とせとよほしむるのたよしの終のちるゑと

源俊賴朝臣

いゝとせとよほしむるのたよしの終のちるゑと

千とせとよほしむるのたよしの終のちるゑと

源俊賴朝臣

いゝとせとよほしむるのたよしの終のちるゑと

千とせとよほしむるのたよしの終のちるゑと

源俊賴朝臣

おのすゝめある 大弁親家

くわの月にはまゝいづれもいふまゝに

藤原の女に

そなたゆゑ一人もなほなほあはれに

西園寺

月乃にてもいふまゝに水に

あそびけしめあはれに

けし

北の院

はるの月にはまゝいづれもいふまゝに

白河の院

月乃にてもいふまゝに水に

あそびけしめあはれに

北の院

はるの月にはまゝいづれもいふまゝに

あそびけしめあはれに

北の院

月乃にてもいふまゝに水に

あそびけしめあはれに

北の院

はるの月にはまゝいづれもいふまゝに

蘇東坡句

さえならよしのちをいかにのぞきしを元ふえぬ

燕尾魚補丸

清き心の人をたしなむ

雪舟とてある

養心齋

霜の舞をうける雪はまじり合はぬ花と有る
歌に

仁孝後人通法親王

題

仁壽後入道法號

たゞてふといひも月歌より雲をけしけり白雲

家奉函教

中江藩の御用書に於て、その名の記をうけむ

京極前王政上臣の守護院の寺今一寺あり

支那

治心通後

七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

蔣恩銘

かきまゝのいよゝみさうなねは五原公

源氏の物語

降雪と谷のけしきに於て梅うめの山はるるも

いづれにせよ、千七百三十九年の

上ノ溪也 陰子 二 惟 及 冲 和 衣

雪のふりしつゝやうきふりふり

を以てしるはたふといふはたふといふ

仁孝にまはれんとす

はたふといふはたふといふはたふといふ

おのすといふはたふといふ

たふといふはたふといふ

にたふといふはたふといふはたふといふ

たふといふはたふといふ

たふといふはたふといふはたふといふ

たふといふはたふといふ

たふといふはたふといふはたふといふ

たふといふはたふといふ

たふといふはたふといふはたふといふ

たふといふはたふといふはたふといふ

たふといふはたふといふ

たふといふはたふといふ

たふといふはたふといふはたふといふ

たふといふはたふといふはたふといふ

たふといふはたふといふ

たふといふはたふといふはたふといふ

たふといふはたふといふ

西に去る

に遠くはるかに去るにや
都下を

に去るにや
都下を

に去るにや
都下を

に去るにや
都下を

西に去る

に遠くはるかに去るにや
都下を

に去るにや
都下を

に去るにや
都下を

に去るにや
都下を

に去るにや
都下を

平此書乃とんるま

はつ

おとけききりよのきりきりいふきりきり
成言成懐のきりきり

惟宗彦

おとけきりよのきりきりいふきりきり
源支

おとけきりよのきりきりいふきりきり
年

前律師後家

おとけきりよのきりきりいふきりきり

おとけきりよのきりきりいふきりきり

おとけきりよのきりきりいふきりきり

おとけきりよのきりきりいふきりきり

惟宗彦

おとけきりよのきりきりいふきりきり

おとけきりよのきりきりいふきりきり

おとけきりよのきりきりいふきりきり

おとけきりよのきりきりいふきりきり

千載和祢集卷第七

離別哥

依使の饑乏けるを以て之を傳ふる

義原更方軌

いふ心をもて人を思ふるは、この世の松風
有國人をよみてなむける時、ふたつ

前人所未

わかれわかれにてわかれ今とてまよふことひかたじけなく思ふ
をふよまふれとける人のよきとて悔ふ
きつゝ九月はくひたのちるゝおとれるあはれ

とよめ

家

ちよとるまのちよとるまのちよとるま
河原時るそすあけの時心
ふりし

人納云々

人納之矣

かきくけこ

前中初之通房

幼少を以て之をわかれ道の世に
 源俊賴に

濾後預乾片

わすらよのこころにけりて日暮のそよよ
 暁のよそよと傳ふやうにわすれやうに

しるしをあらわすにふさわしいものなり
はるかにふさわしいものなり
てふはふさわしいものなり
ふさわしいものなり

あつたふさわしいものなり
ふさわしいものなり
ふさわしいものなり
ふさわしいものなり

ふさわしいものなり
ふさわしいものなり
ふさわしいものなり
ふさわしいものなり

ふさわしいものなり
ふさわしいものなり
ふさわしいものなり
ふさわしいものなり

正徳二年九月廿二日
 秋、九月廿二日、
 正徳二年九月廿二日
 正徳二年九月廿二日

源惟國年二六傳ありて終つてとるなり

一 仍ちるを休國にまゐける時とて

やうに送るにはやうに書ふものよ是所波

の徳曲のことらる事と云へば

ろのよの傍々まふにふとふくはくは

付予傳書
入道前之存

そそけんをよそをむきかきあの浪よる。

人ノ體ハ傳ヒテハ

右衛門督賴文

上
下
中
左
右
前
後
東
西
南
北
東南
西南
東北
西北

多可沃傳事時刻の心とあり

養正堂

わかれもまた人へ向う眼おるまじく

愛子

千載和歌集卷第八

羈旅奇

題

藤原朝永和歌

晨の月と清き水とを今昔とてよめ改のま
ほね寺入道家の夢よれりいふと内を
み侍もつとる月とていふとみ侍もつ

中納言俊

くるまに也次へのまの板金一月とれとてま
月並旅宿とていふとみ侍もつ

藤原朝永

あつたる侍とていふと秋のまの月とて

坂河原の侍とていふとまの月とて

中納言国信

流るる水の月とていふとまの月とて

外海初雪とていふとみ侍もつ

八條末の侍とて

よくはねの侍とていふとまの月とて

あつたる侍とていふとみ侍もつ

藤原朝永

水の月とていふとまの月とて

丹後國よはれはくも時よある

東海衛門

とまらちやまのよの秋の枝さあろあせハ
はの國よはれはくも時よある
ありはくも時よある

他國は部

まらちやまのよの秋の枝さあろあせハ
はの國よはれはくも時よある
ありはくも時よある

津守有妻

はの國よはれはくも時よある

天にえ年女宮の秋の枝さあろあせハ

くはくも時よある

女宮の甲斐

はの國よはれはくも時よある

はの國よはれはくも時よある

くはくも時よある

源雅克

はの國よはれはくも時よある

はの國よはれはくも時よある

くはくも時よある

よははははは

はの國よはれはくも時よある

松の枝と何のあはれむしのやうな草のこい

人吹門を去る

花の野のまじりて病れぬれうとて張れり

義経の道に

更紗やとれけり月とてあはれ我とてい

待良門は海河

あはれけりあはれけりあはれけり

あはれけり

海のとてあはれけりあはれけりあはれけり

あはれけりあはれけり

浦のとてあはれけりあはれけりあはれけり

あはれけりあはれけりあはれけり

月とてあはれけり 田信法師

あはれけりあはれけりあはれけり

あはれけりあはれけりあはれけり

あはれけりあはれけり

あはれけりあはれけりあはれけり

あはれけりあはれけりあはれけり

あはれけりあはれけりあはれけり

あはれけりあはれけりあはれけり

あつたふりまゝにわかれなう
わかれなう

なまゝにわかれ

口をきくふりまゝにわかれなう
海を渡るふりまゝにわかれなう

ふりまゝにわかれ

くちをきくふりまゝにわかれなう
わかれなう
ふりまゝにわかれなう
ふりまゝにわかれなう
ふりまゝにわかれなう
ふりまゝにわかれなう

なまゝにわかれ

くちをきくふりまゝにわかれなう
わかれなう
ふりまゝにわかれなう
ふりまゝにわかれなう
ふりまゝにわかれなう
ふりまゝにわかれなう

なまゝにわかれ

くちをきくふりまゝにわかれなう
わかれなう
ふりまゝにわかれなう
ふりまゝにわかれなう
ふりまゝにわかれなう
ふりまゝにわかれなう

なまゝにわかれ

くちをきくふりまゝにわかれなう
わかれなう
ふりまゝにわかれなう
ふりまゝにわかれなう
ふりまゝにわかれなう
ふりまゝにわかれなう

なまゝにわかれ

頼るあまのなをけりていふくいのすも
行方たひし合とて人へ渡り傳へし時
頼宿時雨といふやうに傳へる

なと人傳へる

わがまゝにいふやうに頼のたよりを時雨に

後には師

いふやうに頼のたよりを時雨に

人へ伝へる

草花も頼のたよりを時雨に

源仲徳

たよりを頼のたよりを時雨に

あまのなをけりていふくいのすも

傳へる

頼政前の人

さうして頼のたよりを時雨に

刑部卿頼輔

のたよりを頼のたよりを時雨に

白く伝へる

あまのなをけりていふくいのすも

頼政のたよりを時雨に

仁徳天皇

うさみひのゑをい張ねき流ひきとわれ袖六
張のすきとふ伝もろ

法下志田

張のふと張ねて草花反のうらと反またん
ん草花反降る

草花張ねのふとふとふとふとふとふとふと
ふとふとふとふとふとふとふとふと

法服志田

ふとふとふとふとふとふとふとふとふと
ふとふとふとふとふとふとふとふとふと

法服志田

張ねすのふとふとふとふとふとふとふと
ふとふとふとふとふとふとふとふとふと

法服志田

からつふとふとふとふとふとふとふと
ふとふとふとふとふとふとふとふとふと

法服志田

張ねすのふとふとふとふとふとふとふと
ふとふとふとふとふとふとふとふとふと

法服志田

よき

藤原資実

頼朝より書きたるすけの時内におきて、うねられ

頼朝のすけとてよき

人申に親守

おれり不敵の言や頼朝にて、あまういへに、あまういへ

うのあまういへ、あまういへ、ね國に、あまういへ、時

よき

平康頼朝右様

あまういへ、あまういへ、あまういへ、あまういへ、あまういへ

あまういへ、あまういへ、あまういへ、あまういへ、あまういへ

頼朝中威きとて、あまういへ、あまういへ、あまういへ

信濃下様

あまういへ、あまういへ、あまういへ、あまういへ、あまういへ

田信法師より書きたるすけの時内におきて、うねられ

頼朝のすけとてよき

藤原資実

頼朝より書きたるすけの時内におきて、うねられ

あまういへ

千載和歌集卷第九

哀傷寄

花のさかよふ庭の頼るもよるひていそ
よまればもろも中侍室おねはるもよ
と侍るもむ後のひさるも侍る
ともしももろもろの中ねも頼るも
まろもろの年の花を人々おねは
侍るもろも中侍室のひ
まろもろの年の花を人々おねは
侍るもろも中侍室のひ

也一

前人おねは

新人おねは
新人おねは
新人おねは
新人おねは
新人おねは
新人おねは
新人おねは
新人おねは
新人おねは
新人おねは

新人おねは

新人おねは
新人おねは
新人おねは
新人おねは
新人おねは
新人おねは
新人おねは
新人おねは
新人おねは
新人おねは

新人おねは

新人おねは
新人おねは
新人おねは
新人おねは
新人おねは
新人おねは
新人おねは
新人おねは
新人おねは
新人おねは

新人おねは

小中宮又かれ給へもる廿九日のまじり
すくしと門後より候もる日人へあけ
こもるは候もる 小井の令ぬ

新井よりていものおまはわれのうらみかれ使を
わす一年のき御役人掌金とてしき
十二月ついでと人抱えもる二條院のいふ
内殿よりもる時まじりて候もるいふ
侍もる 前中宮より

也ー 大抱えもる

かきいふいふはわかれいふいふはわかれ
とけきいふいふはわかれいふいふはわかれ
たわいふいふはわかれいふいふはわかれ
いふいふはわかれいふいふはわかれ

いふいふはわかれいふいふはわかれ
恒後より候もるいふいふはわかれ
いふいふはわかれいふいふはわかれ

義経道信殿に

とてえたらわかれいふいふはわかれ
いふいふはわかれいふいふはわかれ

ちとわろしきいふもあつたといふ
よきといふ

赤坂山

つねに又わろしきいふもあつたといふ

いふ

つねに又わろしきいふもあつたといふ

あつたといふもあつたといふ

ていふものなりといふ

源安春宛に

おとよしきいふもあつたといふ

おとよしきいふもあつたといふ

ついで

平雅康

おとよしきいふもあつたといふ

おとよしきいふもあつたといふ

おとよしきいふもあつたといふ

おとよしきいふもあつたといふ

おとよしきいふもあつたといふ

いふ

源安春宛に

おとよしきいふもあつたといふ

おとよしきいふもあつたといふ

後中御之回儀申上付もる所月外に
ろくして付もる所よりつけ

行中御之儀

昔はの秋よりおる所はあつた

也

中御之回儀

おる所よりおる所よりおる所より
おる所よりおる所よりおる所より
おる所よりおる所よりおる所より

後中御之儀

昔はの秋よりおる所はあつた

おる所よりおる所よりおる所より
おる所よりおる所よりおる所より
おる所よりおる所よりおる所より

後中御之儀

おる所よりおる所よりおる所より
おる所よりおる所よりおる所より
おる所よりおる所よりおる所より

後中御之儀

おる所よりおる所よりおる所より

大炊門左衛門長右衛門の傳をうけて
て傳へられしもの傳へるをうけて傳へる

たのおかい

そなたのふしをいふはうたふしなり

母の二位方となりて後戻りける

玉印成泥

南に下るやふしきうをいふ

母の服に傳ふるや又此傳二位方まら

下等時談傳也
藤原良暁法師

かきふあきさくえふはあゑ海之をわたり

このころから、

me

右京人又秀能

こととてさけいふのやうにけうくのわれゆき

後入道法親王が御傳の
おしるをす月

在平溪傳書
仿郭下性

入やゝあねわれのきりしはとていふに

おや
の
へ
ひ
ま
ま
て
傳
ふ
と
う
ね
は
る

のたぐひをいふ

友字文脩範

野
上
に
い
る
み
な
や
池
を
い
る
み
な
の
下
に

あはれは侍候もさうに、いかにいふにやうな
て侍候しやう 侍候乾玄

ちよまのよつと、いかにいふにやうな侍候もさ
花園左大臣のあはれに、いかに侍候しやう
そ、侍候もさうに、いかに侍候しやう
のいふにやうに、侍候もさうに、いかに侍候しやう
て侍候しやう 法下中

あはれは侍候もさうに、いかにいふにやうな
ちよまのよつと、いかにいふにやうな侍候もさ
花園左大臣のあはれに、いかに侍候しやう
そ、侍候もさうに、いかに侍候しやう
のいふにやうに、侍候もさうに、いかに侍候しやう
て侍候しやう 法下中

あはれは侍候もさうに、いかにいふにやうな

侍候乾玄

あはれは侍候もさうに、いかにいふにやうな
ちよまのよつと、いかにいふにやうな侍候もさ
花園左大臣のあはれに、いかに侍候しやう
そ、侍候もさうに、いかに侍候しやう
のいふにやうに、侍候もさうに、いかに侍候しやう
て侍候しやう 法下中

あはれは侍候もさうに、いかにいふにやうな

侍候乾玄

あはれは侍候もさうに、いかにいふにやうな
ちよまのよつと、いかにいふにやうな侍候もさ
花園左大臣のあはれに、いかに侍候しやう
そ、侍候もさうに、いかに侍候しやう
のいふにやうに、侍候もさうに、いかに侍候しやう
て侍候しやう 法下中

千載和歌集卷第十

賀奇

みよたあへくけの時多ねぬにけりせは
もろこ八條院内親王とてもつたの思ひ
て作也年あといふは清されもつた
かむたあけり 院御親

いよせとあつたあつたあつたあつたあつた
後之條内を
あ

うてあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
祝ふあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

堀河院御製

みとせまてあやうきす極花柳をふくむるあはれ
をねははちあはせなうてのこを花年
久といふらんさこれれつうまらくくく
伝きき 人知を忠教

かやうにわすれの梅より花年とあやうきあはれ
堀河院の時をねあはれすの日記を花と
いふはあやうき伝けき

權中卿公後主

みとせまてあやうきす極花柳をふくむるあはれ

自河院をねあはれすの日記を花と
年といふはあやうき伝けき

源中卿公の御代

神代よりあはれすの日記を花と
京極をねあはれすの日記を花と
は祝のらんさこれれつうまらくく

みとせまてあやうきす極花柳をふくむるあはれ
二條をねあはれすの日記を花と
本はより松枝映水といふはあやうき
きき 京極をねあはれす

ふもかたしづの宮のあすはねいもさうけんし
浜河院出するそすちまけける時よりん
もよめる 二條院と今も言れぬ
物とをばうしうきんしむけのそめねのいとし
祝のさきある 義忠とさう
たふのふいおのほくきんしむけのいとし
保延二年法金剛院より京有り菊英
多秋といふを傳せられ傳まると後傳
ける 法保より入道と改とに
まけはるる月よりいふもいふと改とに

花園に在る

八雲のふがしうきんしむけの秋をわねと
八條院前と改とに
ふ早旅神代のもくしうきんしむけの秋
るそすちまけける時よりん
崇徳院御製
おふのねと改とに
二條院の時大内よりいふと改とに
花有るもといふと改とに
後傳もといふと改とに

あつてはつてのまゝにうゑるもよしとる花梅る
うゑるのまゝにうゑるもよしとる花梅る
よき世後する 二條院清盛
白雲のうゑるもよしとる花梅る
るき年、ふ後より時の花の年

或る内親と

しあつてはつてのまゝにうゑるもよしとる花梅る
花梅るをうゑるもよしとる花梅る
一花乃年めきしうゑるもよしとる花梅る

白雲のうゑるもよしとる花梅る

あつてはつてのまゝにうゑるもよしとる花梅る
二条院はつてのまゝにうゑるもよしとる花梅る
ふたつてはつてのまゝにうゑるもよしとる花梅る
清一はつてのまゝにうゑるもよしとる花梅る
伝もる 大炊師にうゑるもよしとる花梅る
あつてはつてのまゝにうゑるもよしとる花梅る
田原のあつてはつてのまゝにうゑるもよしとる花梅る
あつてはつてのまゝにうゑるもよしとる花梅る
あつてはつてのまゝにうゑるもよしとる花梅る
あつてはつてのまゝにうゑるもよしとる花梅る
源内親と

美滋の預知片

壬午の春、
 白川に於て、
 稀壽神曰く、

前中秘之通商

又早旅神田乃甲の如き付りともなく咲し
 花の時久き二年大葦今の如き花
 俗奇近江田々松のものを讀了

宮内口永氣

Handwritten signature: *John W. ...*

平浪元年人壽今也此方風俗奇近江
國千坂浦をよめる

崇禎後集

文代の教よ生うけりてふるきりしうのうけりてふるきりしう
 同大常令主基方瑞春令丹波國雲田
 村よりあり
 刑部卿範之

刑部

あつたのはさやうな代りか室田のしつゝいふやう
うゑに金座の時に廿二年大毒令出た
の以房氏のすゝ 宮内へ水乾

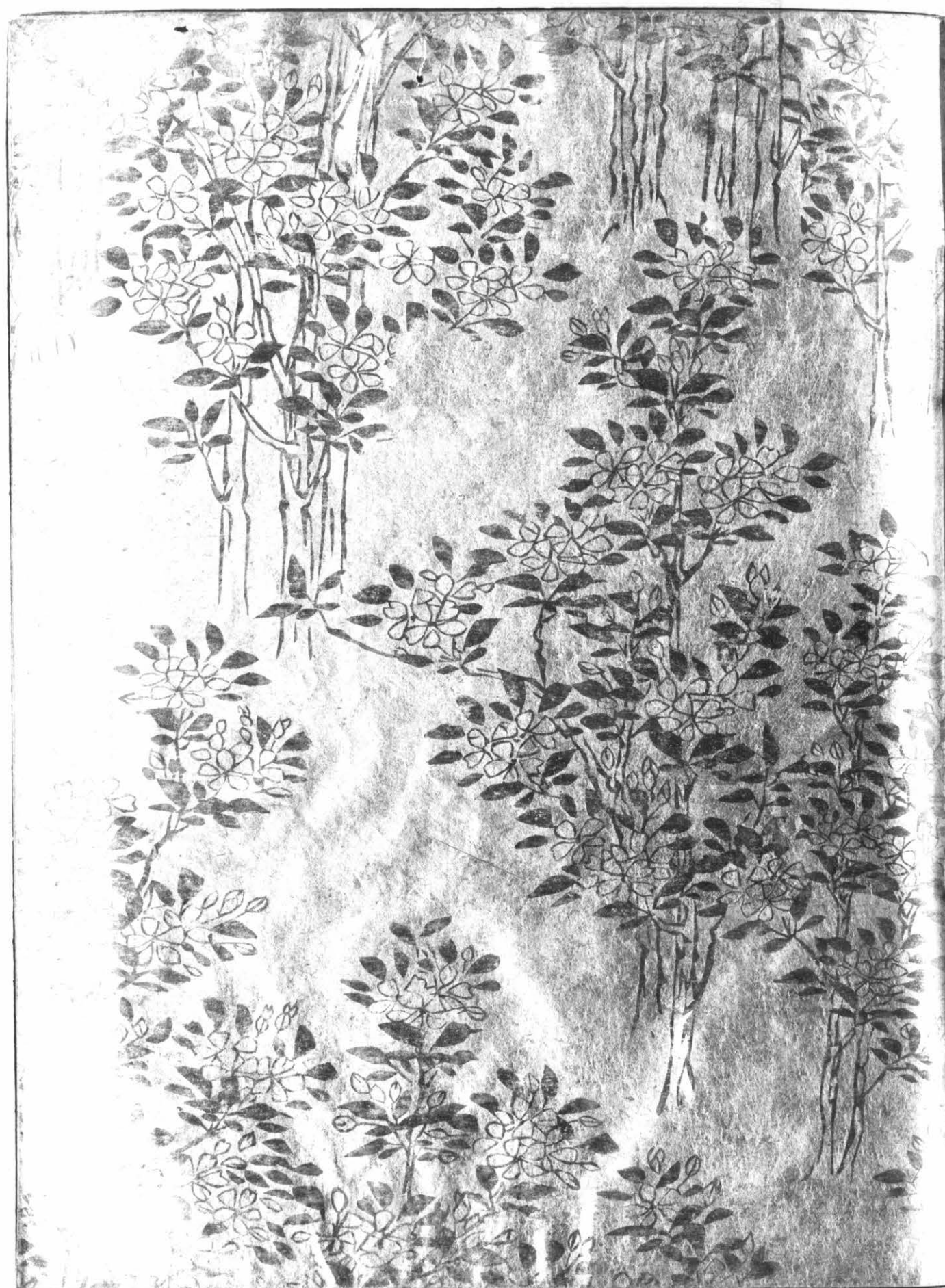
寺すふるを元代より坂山の天の板に

今上の御時え歴え年大嘗会也紀元
俗字之御山御山

藤原季理朝臣

とよあつと神乃山の敷しやなをまのけの
まーなるむ

九州大學圖書印



大正十一年

